
離郷距離

雨咲ひいら

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

離郷距離

【Zマーク】

Z7333C

【作者名】

雨咲ひいら

【あらすじ】

恋人の離郷に対するアクション。

「役者になる為に上京した彼氏が、昨日、戻ってきたの」
激しい喧嘩が展開される休み時間、後席の女子生徒達がそんな話を切り出したので、僕は何気なく留意した。

「それまでは殆ど連絡を取らなかつたし、こつちに戻つてくる事も無かつたから、別れたようなものだつたけれど」

頬杖を付いていた僕は、窓の外を眺める素振りで、話の続きを待つた。

話し手の彼女の声は、妙に落ち着いていて、大人びていた。
僕たちはあと一月で、高校生になる。

「オーディションに落ちて、意氣消沈して、帰ってきたの。お前と島で一生を過ごすんだって」

間の抜けた含み笑いが聞き手から呼応される。耳に障られた僕は、少し苛々している。

「私モヤ、正直、彼に対しても嫌悪感を覚えたのだけれどね。何だか、こいつ、それ以上に良い気分になつたせいか。私自身はそんなに悪い気はしなかつたんだ」

彼女は少し唸つて何かを思考した後、授業開始のチャイムと共に、このように話を締めた。

「ざまあみろ、とも違う、別の優越感。支配欲とは異種でありながら、その延長であるようなもの、かな」

高校入試の試験会場で、彼は堂々と起立していた。

その眼差しは、彼のカソニングという不正を指摘する試験官には向けられず、ただ一点を、刺すように見つめていた。

僕は彼から目を反らし、得意教科の数学に取り直そうとした。

しかし僕の指先は不覚にも大きく震え、記号を綴ることすらままならなかつた。

胸の高鳴りが止まない。

僕の動搖が他の人達に伝播するのではないかと、不安に拍車がかかつた。

彼の、鉛筆を模したシャープペンシルが机から転がり落ち、タイルの上で乾いた音を立てる。

幾重にも折り畳まれた紙片が、試験官の手によつて彼の前に突き出された。更に注目が集まる。

試験官の鬼気迫つた質問に何も答えず、彼は僕を見て疲れた顔で微笑んだ。

僕は再び彼から目を反らして、額から流れ落ちる汗を袖で拭つた。

試験の帰り道、彼は頭を垂れながら、吐き出すように呟いた。

「学力でしか出られない島つていうのは、本当」

僕は躊躇いがちに頷く。

「でも、俺は、島を出るよ

僕は手で鳥の形を作つた。

「グライダー」

快晴の青空の下、三機の小型戦闘機が通過する。

並木道に立つ銀杏の上で轉る鳥たちの唄が、不自由な翼達の轟音で搔き消される。

「失敗したら、消えるだけ」

その言葉は胸が痛くなるほど明瞭で、悲しく響いた。彼は空を見上げる。

きつかけはハンググライダーの雑誌だつた。

帰宅路の途中にある書店で、彼は雑誌を眩しそうに見つめながら、確信したのだ。

「不可能ではない。上昇気流に乗れば、どこまでも行けるんだ」

本来なら、学習、訓練を重ねた上で免許を取得し、飛行が可能に

なるといつ。

日本の最長飛行記録は約200km。本土までの距離は15kmで、島の最標高は535m。

「親父が趣味でやつていて、分かるんだ。かなりの距離を飛べる」

「彼は目を輝かせて、僕に説明を続けた後、額に手を当てた。

「今まで忘れてた。こんな脱出方法があつたんだ」

僕は急いでクルージングの雑誌を探し、彼に見せた。

「連絡船には親の同意がなきゃ乗れないし、積荷に隠れるなんて、こそこそしたことはしたくない。それに、船を造るなんてのはナシだよ。本末転倒だから」

そして彼は決心したように、胸に手を当てて、力強く宣言した。

「俺は空を舞つて、この島を出るんだ。鳥つて、自由の象徴だろ?」

不安な僕を説得するように、彼は続ける。

「確かに自殺行為に見えるかも知れないけど、安心しろって。途中で駄目だと思つたら帰つてくるし、海に落ちても、ライフジャケットがあるから大丈夫。携帯も防水袋に入れておいて、何かあつた時はそれで連絡する。不安ないだろ?だから、泣くなよ」

僕は手に持つた雑誌に目を落とし、結局、彼の確信に最後まで相槌を打てなかつた。

卒業間近の、開放的でありながら寂しさの漂う教室の隅で、彼はハンググライダーの教則本を開いていた。

進路が決まつた生徒が大半を占める中で、高校へ進学せず、就職しないのは彼だけだつた。

僕は、ブレザーの袖を掴んで伸ばした両手を石油ストーブにかざしながら、その姿を見守つていた。卑しい噂話の中で、彼は孤立を恐れていなかつた。

授業が終わると、彼は離陸練習をするために自転車で山を登る。

整地された斜面の草原は、美しい毛並みを持った動物の腹部のようで、時折、風に撫でられてはくすぐったそうに隆起する。僕はその波を一望できる平らな岩の上に座つて、彼の練習を見守つた。本土の進学校への推薦入学が決まつていた僕に与えられた大量の時間は、惜しみなくその日課に注がれた。

彼の見つめる先には、蜃氣楼に揺れる本土があり、夕暮れで点火し炎上するそれは、この世の果てを彷彿させた。

赤く溶解する太陽に走り込んでいく彼を見て、僕は一つの神話を思い出した。

蝶の翼で牢から脱出する男。

男は父の警告を無視して空高く飛んだ。そして、太陽に近づいて蝶の翼を溶かされ、海へ墜落した。

僕には警告する抑止力も無く、太陽の熱に溶けない翼を与えることもできない。

そしてまた、一緒に飛び立つ勇氣すらもないのだ。

一心不乱に太陽に手を伸ばす彼を見て、僕は深い無力感を覚えた。しかしその一方で、一つの行動を思いついていた。

それは、難しい事ではなく、今の僕にも十分にできることだった。

卒業式を終えた夜、僕たちは滑走の丘に集まつた。彼がお酒を持ってくる。

ビールに缶チューハイ。おつまみもある。

「買つてきた、と言いたいところだけど、やっぱ厳しいや。家から持つてきたよ。悪いな。親父とお袋が飲んでるやつなんだ」

そう言って、僕にグレープフルーツサワーを渡す。

ビールを一気に喉に流し込んだ彼は、軽いげっぷを出して、話を切り出した。

「本当は親父の跡を継いで、この島で造船しようと思つてた。だけ

「俺、頭悪いし、親父嫌いだし、それに、興味も全く無いって、分かつてたんだ」

人差し指でプルトップを弄りながら、彼の目は静かな光を忍ばせていた。

「それが誰のせいでもないんだって分かつてる。もちろん、自分のせいでもない。今だから、そんな覚悟ができるんだと思つ」

僕はみじろ身動いだ。

触れたい。

触れたい。

今にも飛翔し、空に昇華されようとしているその魂に、触りたい。

そう思うのに、手が動かず、届かない。

指先が空気を引っ搔いて、僕は只只、この身を震えさせている。

「寒いの？」

僕は首を横に振った。言葉も出てこない。言葉なんて、もとより頼りにならない。

こんな時、彼から触れてくれればいいのに、と切実に思う。同時に、そんな自分を卑しくを感じるのに、欲望に歯止めが利かない。自制ができない自分が恐ろしく、憎らしい。

彼は黙つて、僕に毛布を重ねる。

「世間から見れば、俺はまだ子供だし、俺自身も子供だと思つてる。分からぬ事とか、知りたい事、たくさんあるしさ」

彼が絶好だとつづいていた風は止まない。ひつきりなしに僕たちの体を吹いては、容赦なく体温を奪う。

「だから、これは言い訳かもしれないけど、お前の事、正直、まだよく分からぬんだ。一緒にいて心地良いし、大切にしたいと思つてる。嬉しいんだ。でも、ただ、その、自分の気持ちが良く分からぬせいが、お前の事も、はつきりしない」

僕は夜の向こうの本土を意識して、彼に目配せをした。

「島を出れば、それが分かるような気がする。それまで待つていて欲しい。待つていて欲しいんだ。その時まで、何があつても、俺は

諦めない

彼は巣の下に咲いていたスミレを摘んで、僕の髪に飾った。

「雨が降りうと、風が吹こうと、俺は俯かないし、お前を見失つたりしない」

花のようだ。僕はそう付け足そうとして、喉のどに口でこら堪えた。

「ちょっと行ってくるよ

そう云つて、彼は立ち上がり、夜明けと共に離陸した。

僕は山を下りながら、携帯電話の液晶パネルを注視していた。

出発直前、僕はハーネスの中に彼の携帯電話を隠していた。

携帯電話について何も言わなかつた彼は、僕の気持ちを知つていたのかも知れない。

GPS機能で彼の着陸地点を確認して、僕は息をつ吐いた。

風向きが変わつたのだろうか。高度が足りなかつたのだろうか。もしかしたら空中でスパイラルスピンを起こしたのかもしれないし、分解という可能性もある。

彼の父親が所持していた旧式のハンググライダーは、明らかに破棄されるべき故障品だった。

位置以外をモニターできないのは、どうにももどかしい。

次はカメラでもつけておこうか。ハンググライダーの構造上、隠す場所は限定されるが、小型なものなら出回つている。フレームへの装着も可能かも知れない。

彼の携帯電話に電話をかけてみたが、僕の着信は誰も受け取れなかつた。

僕は彼の離郷距離を記録して、折り畳み式の携帯電話を閉じた。

海岸に到着する。

潮の流れから、彼が打ち上げられるのはこの海岸だらう。

新設されたテトラポットの上で毛布をまとい、僕は朝日を待った。

海と空の境界線が太陽で溶け始めた頃、墜ちて朽ち果てた翼が白波の岸に打ち上がる。

その翼に絡まつた彼は、橙色に焼ける砂浜に青白い頬を擦らせていた。

僕は立ち上がり、朝焼けの光に全身を照らされながら、焦げた風で口元に入ってきた髪を静かにそつと払つた。

軽い眠気を覚える。その直後、小さな欠伸が出る。

僕ははつとした。

幸福な気持ちに浸つていて自分に気が付いた。

そして、ある女子生徒の言葉を思い出したのだ。

ざまあみろ、とも違う、別の優越感。支配欲とは異種でありながら、その延長であるような

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7333c/>

離郷距離

2010年10月8日15時20分発行